

カナダの農業

食糧生産・輸出は世界有数

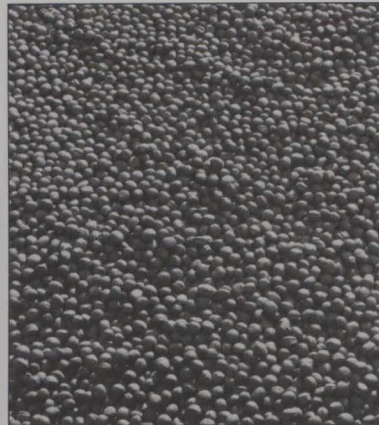
汽車や自動車で西部カナダを通過する人は、誰しもうんざりするほど果てしなく続く大農場地帯の広さに驚かされる。

ここは世界第二の広大な国土をもち、世界でも有数の農業生産国で、指折りの食糧輸出国でもあるカナダの、大穀倉地帯だ。カナダの農地面積はおよそ一億七千万エーカー、森林などの未改良地を除いても一億一千万エーカーもあり、これだけで日本の総面積を上回る。それでも、農地面積はカナダの全国土のわずか七・四パーセントに過ぎない。

工業の発展とともに、国民経済に占める農業の相対的地位は低下した。農業就業人口は総労働力人口の四・九パーセント（一九二六年は約四〇パーセント）に、そして国民総生産に占める農業生産の割合は、四・二パーセント（同一八・二パーセント）に落ちた。因みに製造工業の対国民総生産比は二二・八パーセント、サービス業は一九・一パーセント。しかし、カナダは世界有数の食糧生産・輸出国であり、農業―特に畜産、穀物、酪農品―が依然としてきわめて重要であることに変わりはない。

地理的には、マニトバ、サスカチュワン、アルバータのいわゆる平原三州が、農地の実に四分の三を占める。平原の温度は冬の零下五六度から夏の摂氏四一度まで大幅に変動する。平年はそれほど極端に変わるわけではないが、それでも夏はからからに乾燥して暑く、冬は厳しい。年間雨量はおよそ三十三センチから五十七センチである。こういう気候は、特に高蛋白質の硬質春小麦の生産に適し、平原三州はまた、飼料用穀物の生産や畜産も盛ん。

●**菜種** 戦時中の1942年、エンジン用潤滑油を抽出するため、大平原一帯で手広く栽培された菜種は、今や小麦、大麦に次ぐカナダ第三の重要作物だ。菜種栽培は、終戦によってその使命も終わるかと思われたが、食用油のすぐれた品種が開発され、搾油されてマーガリンや食用油の製造に利用されるようになった。また菜種粕は飼料となる。これまでのためみない研究によって、栽培法が改善され、新しい品種が開発され、菌や害虫も駆除された。これにより、過去25年間で菜種の生産は実に30倍も増えている。肉に代わる蛋白源として、菜種に対する期待は大きい。



特にアルバータ州南西部は大々的な牛の放牧で知られる。菜種、亜麻仁、ひまわりといった油糧作物もだんだん重要性を増してきた。そのほか、平原地帯で栽培されているものに、子実用穀類、飼料用穀類、てんさい、野菜などが上げられる。大平原に次ぐ農業地帯は中部地方。セント・ローレンス川、オタワ川、五大湖などのおかげで気候はわりと穏やか。緯度で見ると北海道と同じまたはより北に位置しているが、特にオンタリオ州西部などは冬も厳しくない。降雨量は年間七五ないし一一五センチ。こうした条件が備わって、前述の両河川沿いやオンタリオ州南部は、農場の規模こそ比較的に小さいものの（大体三〇ヘクタールから一四〇ヘクタールぐらい）、カナダでも指折りの農業生産地となっている。

この地域で特に盛んなのは、酪農および肉牛、豚、家禽などの飼育を中心とする畜産。トーマロコシ、混合穀物、冬小麦からす麦、大麦などが飼料用として、また大豆、ポテト、黄色種煙草、リンゴ、ももや梨、野菜などが換金作物として栽培されている。

ニューファウンドランド、プリンス・エドワード島、ノバ・スコシア、ニュー・ブランスウィック、ケベック州のギヤスベ半島からなる大西洋沿岸一帯は、海流の影響で気候はかなり穏やかで、地勢と相まって混合農業に適した条件を作っている。

特に飼料用穀類に適し、そのため畜産も盛ん。漁業や林業に従事する兼業農家も、この地域では珍らしくない。農地は一般に小規模だが（ニューファウンドランドで平均およそ六〇エーカー、ノバ・スコシアで二二〇エーカー）。因みに、サスカ

●**好品種生産に受精卵移植** カナダでは、品種のすぐれた牛をできるだけ速く増産するため、受精卵の移植が盛んに行われている。受精卵をとりだし、非純血種の雌牛に移すと、純血の子牛が生まれる。また技術の進歩により、受胎後14日目の胎児でも性別が分かるようになったため、肉用の雄牛のみ、あるいは乳牛用の雌牛のみと、生み分けすることも可能。



対日輸出の目玉 カナダの食糧品

小麦、菜種、大麦、肉類など

カナダの対日輸出品をみると、農産物がいかに大きい比重を占めているかが分かる。

昨年の対日輸出は総額二十三億八千六百三十三万（カナダ）ドル。第一位の石炭五億一千九百五十七万ドルに次いで、第二位は小麦（種子を除く）の二億八千五百九十九万ドル、銅鉱石の二億二千三百二十万ドルが第三位、そして菜種の一億六千六百六十八万ドル、大麦の一億三千九百九十九万ドル、紙・パルプの一億二千四百二十四万ドル、ツガ材の八千九百二十二万ドル、豚肉の六千三百二十七万ドル、にしんの五千五百九十八万ドル……と続く。上位八品目のうち、実に四品目を農・畜産物が占める。以上掲げたほかにも、亜麻仁（二千五百万ドル）、乾燥アルファルファ（一千四百万ドル）、ハム（一千二百万ドル）、小麦ふすま、牛脂、ライ麦、穀物ふるいやすベレット、牛生皮、菜種油、もみ、ふるいやす、もみがら、粉ミルク、牛肉、からし、食用大豆、食用ゼラチンなど、多種多様の農産物が、食糧や飼料として日本に輸出されている。水産物などを含めたカナダの対日食糧（飼料を含む）輸出は八億五千万ドル（対日全輸出額の約三五パーセント）にのぼり、カナダは米国、オーストラリアに次ぐ第三の対日食糧供給国となっている。また菜種や亜麻仁などのように、日本の農産物輸入品の中で対加依存度が百パーセン